

刈羽郡西山町灰爪出土の人骨群所見

新潟大学医学部解剖学第一教室

刈羽郡西山町灰爪出土の人骨群所見

新潟大学医学部解剖学第一教室

本人骨群は新潟県刈羽郡西山町灰爪地内で、
農作業中に偶然、発見されたと称される合計
4個体分からなる。そのうち1個体は、昭和
52年7月19日に、3個体は昭和53年6月8日
にそれぞれ当教室の故小片保教授宛に搬入
されている。小片保教授死去のため、本人
骨群についての報告が遅滞していたが、今回
当教室の石藤克知、松村博雄を中心に本人骨
群の所見をまとめたので、その概略を報告す
る。なお、歯科領域については元当教室研究
生三村一郎氏に教示いただいた。

本人骨群の由緒等については、江戸時代末
から明治時代初期にかかる成長の役に関連す
るらしいとも称されているが、詳しい考古学
的考証が加えられていないので、詳細は不明

である。ただ、人骨群の出土状況、保存の程度あるいは骨質からみると、上述の時代に属する可能性が充分考えられる。また、4個体中の個体にみられる刀痕らしき損傷はその歴史的背景を物語るかのようでもあり興味深い。

一方、人骨形質の地域的、時代的特徴を検討する参考的方法に総合比較法というものがある。本論では、頭蓋の計測可能で主要な項目について、モリソンの偏差折線図を作成し、本人骨群形質の地域的、時代的側面を単的に論じた。比較集団は森田(1950)の関東現代人を基準として、小片ら(1960)の越後現代人、森田ら(1960)、河越ら(1962)の湯島無縁坂出土の江戸時代人および鈴木ら(1962)の芝白金田海軍墓地出土の江戸末、明治初年の人骨群(男性のみ)である。

記載を遂げる都合上、昭和52年度に搬入された個体を第1号人骨とし、昭和58年度搬入のものを適宜、第2号、第3号、第4号人骨とする。第4号人骨は第2号人骨中に混入し

ていた右上腕骨幹の一部である。

なお、本論での刃物による損傷の分類および用語等は鈴木(1956)による。

新見

I. 第1号人骨 (写真1)

1). 出土状況

仰臥、上肢下肢屈曲位で出土している。頸部にも強い屈曲がみられる。手は左右のものが接し、胸部の基部で右上方に位置しているようであり、これらのことから人為的に埋葬されたと考えられる。保存状態はかなり良好である。

2). 人骨のおもな特徴

頭蓋： 脳頭蓋は男性としては、長さ、幅、高さともに小さいが、前頭の付着部は横して

粗糙であり、眉間、眉上弓、乳様突起、前頭部輪郭線の特徴から男性と考えられる。なお、骨盤構成骨である寛骨、大坐骨切痕を中心とする形態もこれを裏づける男性型である。死之時の年齢は頭蓋の主要縫合、歯の咬耗ないし磨耗や寛骨恥骨結合面の形態から壮年期のちごろ（およそ30才前後）と推定できる。

頭蓋長幅示数は頭蓋長さよりの頭蓋中型に属する。上顎部、高径は小さく、幅径が大きいため、コルマンおよびウァイルヒョウの上顔面示数はともに小さく、上顔面部はかなり強い「寸づまり」の観を受する。これはヒトつの中、近世的特徴といえる。しかし、反、歯の程度は全側面角の値から小さいことがわかる。下顎骨の顎下切痕は著明で、下顎体は「ゆりいす」状を受けている。

上顎左第2、第3大臼歯、下顎右第3大臼歯と左の第1、第2、第3大臼歯には軽度（1度）の齧歯がみられる。

頭蓋のあもな項目について、エリソン

(四)

差折線図にて、既述の他の集団と比較してみると、全体的に基準の関東現代人からの隔りが大きいようである。また、概して頭蓋は越後現代人に、下顎骨を含む顔面頭蓋は湯島無縁坂出土や芝白金の旧海軍墓地出土、近世人骨群の傾向に近い項目もみられるようであるが、むしろ全体的には個人的特徴が強くあらわれている頭蓋と考えるべきであろう。

体肢骨その他：主な体肢長骨を中心とする骨格は全体的に大きく、頑丈であり、筋附着部の状態は筋肉質の体格を想像させる。椎体、特に一部の腰椎体周辺には骨棘形成がみられ、また尺骨切痕関節面には二分傾向が認められる。大腿骨、脛骨および足の骨の一部には蹲踞面がみられ、生前蹲踞位を習慣的にとっていたことがうかがわれる。

上腕骨、桡骨、大腿骨および脛骨の最大長からピアソンの式に従って身長を推定してみると、164.6cmとなる。

3). 刀痕様、損傷について(写真2, 3)

頭蓋には鋭利な刃物によると思われる損傷が二ヶ所に認められる。そのひとつは、右側で、前頭骨頬骨突起、頬骨前部から上顎骨外側半部に及ぶ約6cm×5cmの切断面をもつ斬創である。この部はいわば眼窩口外側部と下部に相当し、上顎洞内腔が大きく露呈されている。切断面の状態から斬撃の方向は上方から下方に及ぶものと推される。

もうひとつの損傷は、同じく右側で、上顎歯槽縁より上方約3cmのところを、この縁に平行に切断されているもので、左の第一切歯の位置する部から右側の歯槽全体に、さらには下顎枝の前半部にまで及ぶ創長約8cmの斬創である。切断面は鋭く、平滑であり、この状態から斬撃の方向は前方から後方に及ぶものと推される。

4). 小 括

身長は約164〜165cm程度の比較的

筋骨・たくましい男性を思わせる。年齢は壮年期の中旬で、およそ30才前後と推定される。顔面は強い「寸づまり」であり、中近世的な特徴がうかがえる。頭蓋・顔面部には鋭利な刃物によると思われる損傷が二ヶ所に認められる。

II. 第2号人骨

1). 出土状況

発掘担当者によると、上肢・下肢屈曲位で出土したと称される。保存の状態は比較的良好といえるが、欠損、破損する部分も多い。

2). 人骨のおもな特徴

頭蓋：頭蓋最大長は女性としては大きいようであるが、前頭輪郭線、眉間、眉上弓、乳様突起、外後頭隆起など、特徴は女性型である。これに加えて、一部残存している寛骨の大坐骨切痕の形態からも女性骨と考へては

ば間違っていない。一方、年齢は主に頭蓋の主要縫合の閉鎖の程度と歯の咬耗ないし磨耗から推定してみると、恐らく壮年期後半ごろ（おおむね25~39才頃）とするのが妥当なところといえる。

上顔高は女性としては小さい方ではないが、中顔幅が大きいので、ウィルヒョウの上顔面指数は小さく、上顔面過低型に近い上顔面低型を示す。すなわち、これも第1号人骨と同様に「寸ぶまり」の傾向にある。また、突顎性も一見強いように思われ、顔面は概して中近世的特徴を有している。モリソンの偏差折線図（図2）によつて他の集団と比較してみると、本頭蓋の多くの項目では基準線の現代関東人と隔りが大きいようである。概して、これも個人的特徴が強く表われている頭蓋であると思われるが、下顎骨が現代越後人と傾向がやや類似し、この人骨の地域性と考えるところが少し興味深い。

この人骨には歯が多量に残存

歯24本のうち、1度（C1）のもの3本、2度（C2）のもの2本、4度（C4）のもの4本、計9本にみられる。いずれも未治療であり、生前は歯痛等に悩んでいくことが想像できる。

体肢骨その他： 主な体肢長骨は全体的に細いが、長さは特に大腿骨で中等度からやや長い部類に属する。また、筋付着部も比較的平滑であり、女性的である。大腿骨の骨幹は、上部、中央部ともに扁平に傾き、その前湾は弱い。前述のように骨盤を構成する寛骨は女性的である。胫骨および足根骨の一部には習性的蹠蹠位姿勢にもとづく異常関節面が認められる。

上腕骨、橈骨、大腿骨および胫骨の最大長からモリソンの式によつて推定身長を算出してみると、おおむね149.1cmとなる。

3) 刀痕様損傷について（写真4）

右側頰部で、外耳孔の上方にみられる幾分凹凸のある2.7cm X 3.2cm程度の不整形の切

断面として残っている。この切断面の様子から、ここを中心としたさらに広範囲に及ぶ斬創と考えられるが、周辺部は欠損しており詳細は不明である。乳突峰葉が広く露呈するかなり深い損傷である。また、これとは別に独立した創長約9cmの切創が、同側の外耳孔後縁にみとめられる。

4) 小括

身長はおおむね149cm程度の女性で、年齢は壮年期後半(35才~39才頃)と推定される。顔面部は「寸づまり」の傾向にあり、かつ突頭性も強いようであり、ここに中近世的特徴がうかがえる。かなり進行した齲歯が多く、生糸は甚の疾患に悩んでいたであろう。右側顔部で、外耳孔の上方に斬創が、外耳孔後縁には切創がそれぞれ認められる。いずれも鋭利な刃物によると思われる。

II. 第3号人骨

1) 出土状況

本人骨は先の第2号人骨と同時に出土したもので、詳細な状況は不明であるが、これも仰臥、上肢、下肢屈曲位であったと称される。保存の状態は第2号人骨とほぼ同等であるが、骨質はやや脆いように思う。出土時と思われる骨の破損、欠損がみられる。

2) 人骨の主な特徴

頭蓋：頭蓋最大長は女性としてはかなり大きい。最大幅は小さく、従って頭蓋長幅示数は強い長頭型を示している。また、バジオン・プレグマ高も小さく、頭蓋長高示数は低頭に偏った中頭を呈する。すなわち、頭蓋は前後に長く、幅がせまく、幾分低いことがわかる。

頭蓋の前頭輪郭線、眉間、眉上弓、乳様突起、外後頭隆起などは本頭蓋が女性のものであることを示す。さらに、骨盤を構成する骨

骨の形態もこれを裏づけている。一方、年齢については、頭蓋の主要縫合の閉鎖があきらかにみられず、歯の咬耗ないし磨耗も軽度である。また、下顎第3大臼歯（親知らず）は埋伏状態にあり、これらの所見と主な体肢長骨の骨端線の状態などから考えて、おおむね壮長期の初め頃（20〜25才頃）と推定できる。

顔面頭蓋は前述のス人骨同様に、コルマンとウィルヒョウの上顔示数から「寸づまり」の中、近世的特徴を有しているといえよう。また、突頸性もやや強いように思う。

モリソンの偏差折線図（図3）をみると、本頭蓋も、多くの項目で基準線である現代日本人よりも大きく隔っていることがわかる。概して、顔面頭蓋に関する折線の傾向は現代越後人に、下顎を含む顔面頭蓋は湯島無縁坂出土の江戸時代人に類似しているように思え、興味深い。

この人骨の歯には、形質的に興味ある所見がある。すなわち、上顎第2大臼歯にみられ

るエナメル滴と下顎右犬歯の過剰根（2根性）である。

本例にも、残存歯のうち5本に齦歯がみられ、その程度は1度（C1）、2度（C2）、3度（C3）のもの各1本、4度（C4）が2本である。第2号人骨同様、歯痛等にかかり悩まされていたと考えられる。

3) 体肢骨その他

主な長骨は上、下肢とも女性としては長い方であるが、骨幹は中等度から幾分細い方に属している。ただ、筋付着面は割合粗糙である。大腿骨の骨幹は上部および中央部ともに前後に扁平である。脛骨、足根骨の一部には、習慣的蹲踞位姿勢による異常丘（蹲踞面）がみられる。

上腕骨、橈骨および脛骨の最大長からピアソンの式に準じて推定身長を算出すると151.1cmとなる。この数値は第2号人骨と同等であり興味深い。

4) 小括

身長おおむね151cmで、江戸末から明治の初めのものとするれば、やや大柄の女性であろう。顔面頭蓋はやや「寸づまり」の傾向を有し、突頸性の比較的強いことと併せて、中、近世的特徴を有するといえよう。また、頭型はかろり長頭に傾いているのも興味深い。年齢はおおよそ壮年期の初め頃で、20~25才程度と推定される。

なお、この人骨には、肉眼的検索からは、刃物等による損傷は認めえない。

IV. 第4号人骨 (写真 5)

骨表面腐食のかなり進んだ右上腕骨外科頭以下の骨幹約16.5cmである。前述の如く第2号人骨に混って出土している。大小の結節核や三角筋粗面などの筋付着部の発達は良好であるところから、断定はできぬが男性を思わせる。

外科頭より約15cm程遠位で、三角筋粗面の下境にあたるところに深さ約2mm、創長約14mm程度の近位から入った、鋭利な刃物によると思われる切創が認められる。また、この創より近位1.5mmのところに1.5長さ1.5mm程度の浅い掻創様のものがみられるが、詳細は不明である。

まとめ

昭和52年7月と昭和53年6月に新潟大学医学部解剖学第一教室に搬入された、西山町灰塚出土の人骨群(4個体)について調査し、次の結果を得た。

1. 4個体の人骨のうち、昭和52年7月に搬入された1個体(第1号人骨)は壮年期中ごろ(30才前後)の男性骨と推され、骨格の特徴から比較的大柄で筋骨たくましい体格を思わせる。推定身長はおおむね165cmである。

2. また、昭和53年6月に搬入された3個体のうち2個体は女性骨(第2号、3号人骨)で、推定年齢はおおむね壮年期の後半(35才~39才頃)と壮年期前半(20才~25才頃)に属し、推定身長は前者がおおむね149cm、後者が151cmである。他の1個体は性別、年齢不詳の上腕骨の一部である(第4号人骨)。

3. 本人骨群の形質的特徴については、顔面頭蓋は広、低顔で、すなわち「寸がまり」の傾向にある。かつ、突頸性の比較的強いものもあり、中近世的特徴がうかがえる。

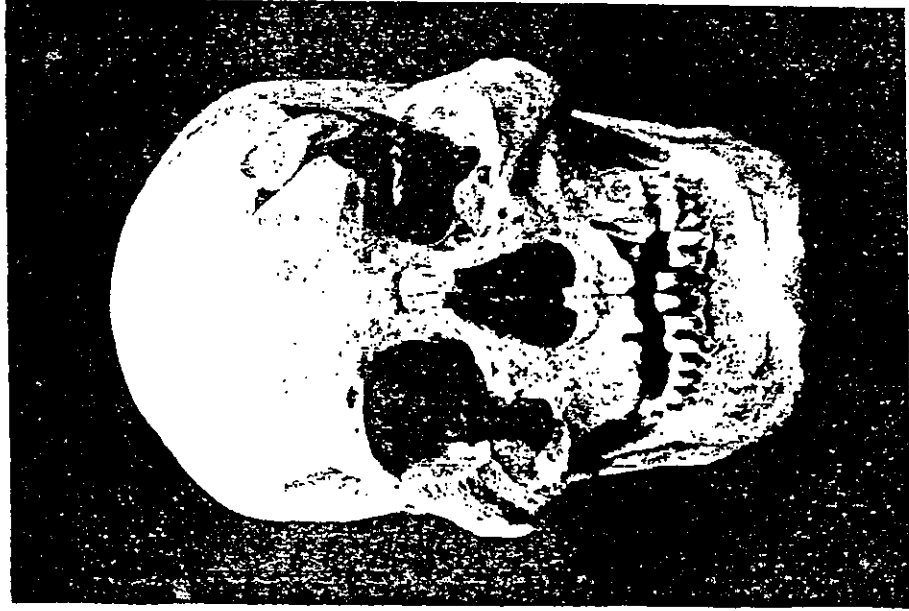
4. モリソンの歸差折線図による検討から、本人骨群頭蓋形質のあるものは現代越後人、あるものは湯島無縁坂出土の江戸時代人骨の傾向に類似しているようにも思えるが、かぎりなくとも明らかではない。むしろ、個人的な特徴のあらわれは頭蓋といえよう。

5. 第1、2および4号人骨には鋭利な刃物によると思われる損傷が認められる。

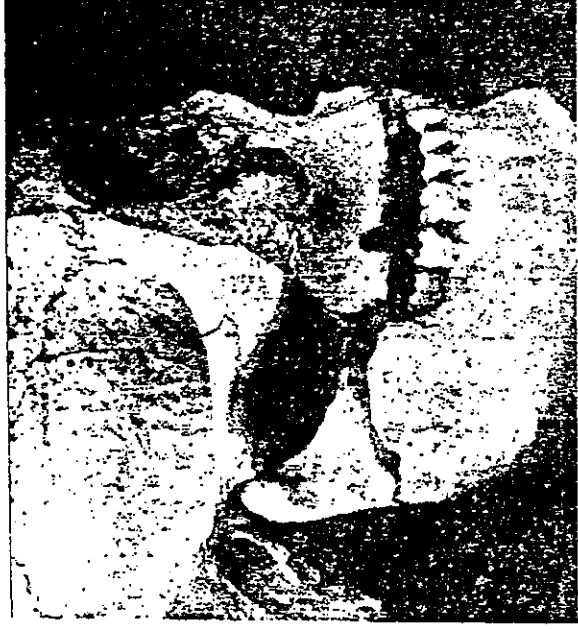
6. 骨質・保存状態等からみて、本人骨群

の土中にあり、その期間はおおむね100年内外とするのが妥当ともいえるが、保存の状態や土壌の性質等種々の外的条件によっても左右されるので断定はできない。

7. 人骨の出土状況から考えて、人為的に埋葬された可能性が大きい。



写真・1
第1号人骨，男性（壮年）顔面鏡・
右側頭部と右上顎歯槽部に
みられる鋭利な損傷に注目。



写真・2
第1号人骨右側面鏡・
損傷部を中心にした拡大
上顎洞の内腔が損傷
の悉露呈している。



写真・3
第1号人骨の右上顎歯
槽部の損傷の拡大（口
蓋側から撮影）
歯槽、歯頸ないし歯根
が水平に切断されてい
る。



写真・4
第2号人骨，女性（壮年）にみられる
右側頭部の損傷・外耳孔の上方にみ
られる比較的広範に及ぶ損傷で，乳
突蜂巣の露呈がみられる。また，外
耳孔後方には切創も認められる。



写真・5
第4号人骨，性別・年齢不詳・
右上腕骨とその骨幹にみられる切創。